

問題一

次の(1)~(10)の——線部の漢字にはその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- (1) かれはユウノウな社員です。
- (2) 自宅と駅とをオウフクする。
- (3) あの先生はシドウがうまい。
- (4) 新製品をテントウに並べる。
- (5) 全員が輪になってスワった。
- (6) 規模の大きな事業を始める。
- (7) 材料をうまく加工して売る。
- (8) 自分と相性のいい人と話す。
- (9) 感性を研ぎすませ絵を見る。
- (10) 着物のひもをきちんと結う。

問題二

次の(1)~(5)のかなづかいが正しい場合は○を、まちがっている場合は×を、それぞれ解答らんに書きなさい。ただし、すべて○で、または×で答えてはいけないことにします。

- (1) とう(十)
- (2) むずかしい(難しい)
- (3) きち(生地)
- (4) うなづく
- (5) おおやけ(公)

問題三

次のア、イの場合の□に入るひらがな一字をそれぞれ答えなさい。

- (1) ゆかい□ あの人と 楽しい 時間を 過ごした。  
ア——線部が「あの人」にかかる場合。  
イ——線部が「過ごした」にかかる場合。
- (2) 親し□ 友だちに 話しかけた。  
ア——線部が「友だち」にかかる場合。  
イ——線部が「話しかけた」にかかる場合。

問題四

次の(1)~(3)のことわざの( )には植物の名前が入ります。その植物名を後の□Aから選び、さらに、そのことわざの表す内容を説明したものを□Bから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) ( )の背くらべ。
- (2) 雨後の( )。
- (3) 瓜のつるに( )はならぬ。

A

ア	かき
イ	なすび
ウ	どんぐり
エ	もも
オ	たけのこ

B

い	ひととき優れたものがないこと。
ろ	子どもが成長するのがはやいこと。
は	何かをやりきるには時間がかかること。
に	子どもは親になるものであること。
ほ	同じようなことが次々と起こること。

問題五

次の文章は、小説『多摩川物語』の一部です。中学生の雅之君は、多摩川の川岸で絵を描いているときに偶然バンさんに出会い、それをふまえて以下の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合で本文の一部を変えています。)

雅之君はバケツをさげたまま歩いた。流れが大きく曲がっているところを越え、遠くに橋が見えてきた。大水の被害は変わらず、河川敷はどこまでも泥をかぶっていた。草地がごっそりえぐられた場所もあった。そこには池ができていて、ビーバーの巣のように灌木が盛り上がって浮かんでいた。

台風ひとつでここまで景色が変わる。これまで慣れ親しんできた多摩川はもうそこにはなかった。雅之君はその荒涼とした風景の向こうに、つい数日前に見たばかりの夕暮れを重ね合せていた。

① 今なら雅之君はわかった。それはいつもの日没でありながら、ただ一度しかこの世に起きない天地のドラマだった。再来することのない光が降り注ぎ、草むらはあらゆる色に輝いていた。目をつぶれば、その鮮やかさは雅之君の内側でまだ失われず息づいている。しかし目を開ければ、それはもう永遠に現れないのだと、変わり果てた河川敷そのものが語りかけてくるのだった。

② 世界にも、自分にも、大きな穴があいたみたいだと雅之君は思った。そしてその穴になにかをあてがうように、雅之君はこれまでここで描いてきた絵や、バンさんがくれたいちいちのアドバイスを脳裏によみがえらせていた。

「絵はうまい。でも、うまいってだけだな。見えているものしか描いていないからだ」

バンさんはボウルを持ち上げ、雅之君の頭上に掲げた。光がボウルのなかでゆらゆら揺れ、魚たちはそのきらめきに絡むようにして泳いでいた。雅之君が初めて見る魚の姿がそこにあった。胸びれや腹びれが小刻みに動き、虹を放っている。

「魚は普通、真横か斜め上からしか描かないだろう。俺たち人間が普段そうやって見ているからだ。でも、川底に目があればこんなふうに見える。角度を変えるのもひとつの工夫なんだよ。絵の技術はあるようだから、こういうのを細密画でやってみな。だれも見たことのない水の世界になる」

すごいねえ、バンさん。さすが元イラストレーターだ。ホームレスの人たちからあがった声を雅之君は覚えている。雅之君も同じように「すごいねえ」と思った。あの瞬間、雅之君は当たり前前の世界のなかに、見知らぬ世界が内包されていることを知ったのだった。

— 中略 —

このあと雅之君は、バンさんと会うようになります。しかし、雅之君の母はバンさんとともにいることを「偽善」と言い、また父もバンさんたちには「盗み」をするといううわさもあると言って、二人とも雅之君に、バンさんに会わないでほしいと言っています。

受験勉強で目の色を変える同級生が多いなか、雅之君は美術部の部屋で夏休みの大半を過ごした。家にいるより平和だったし、絵に向かう

(注1) 偽善:よい人のふりをする事。

バンさんはよくそう言った。「見えないものを描かなきゃ」と。また泥を踏み、一匹のナマズの子を川まで戻しに行きながら、雅之君はその言葉の意味を具体的に感じ取った日のことを思い出した。川原に咲いていた紫陽花を描くうち、いつの間にか迫り出していた雲にやられた時のことだ。

日が陰ったと思ったら、空はいきなり鉛色に変わり、水彩絵の具で描いた紫陽花に雨が直接落ちてきた。どうしよう戸惑っているうち、画用紙の上の花や葉は「I」滲んでいった。あわてた雅之君はスケッチブックを胸に抱え、上流の橋まで走った。そこにバンさんたちが住んでいることを雅之君は知っていた。

③ 迷いがなかったと言えようになる。でも、それまでに雅之君はもう何度もバンさんと言葉を交わしていた。出会った頃のような警戒心はなかった。

ブルーシートの掘っ立て小屋の前で、バンさんは空き缶をつぶしていた。缶に板を乗せ、それを踏んでつぶす作業だった。

バンさんは雅之君にすぐ気づいた。手招きをして、「おい」と声をかけてきた。そしてまわりのホームレスの人たちに「友達だ」と紹介し、④ 歯を見せて笑った。

⑤ 「いいところにきたな。今日は面白いものがあるぞ」バンさんは空き缶から離れると、小屋の奥から透明なボウルを取り出してきた。

⑥ 「今日は優雅な気分に入ろうと思ってたんだよ」ボウルには水が張られ、何匹かの小魚、クチボソやハヤが泳いでいた。他のホームレスの人たちは「またそれか」と笑っていた。「見てみな」

⑦ ことで、ささくれ立っている自分から目をそむけることができた。

雅之君は、バンさんに教えてもらったものの見方を、技術として具体化することに熱中していた。その方向性のみを自分の指針にし、作品を描き続けた。校庭の隅の植えこみから雑草を引き抜いてきては絵筆を握った。大胆に描かれた根が躍り、花や葉を脇に押しやった。だれが見ても新しい印象を受ける植物たちの姿がそこにあった。

美術部員たちの間でも雅之君の作品は徐々に評判になっていった。普段は押し黙っている雅之君だけに、その絵を囲むみんなの声はかえって大きくなった。男子女子ともに「すごいね」と集まってくる。顧問の先生も、⑧ 熱を帯びた口調になった。

「理科の資料図みたいだけれど、描く側の目で生まれ変わっている。こりゃ、アートだ。おい、雅之、どこで思いついた？」

バンさんとの間で起きたことを話そうとは思わなかった。話せば興味本位でいろいろ訊かれるに決まっている。雅之君は笑みを浮かべながら、新たに得た「目」についてはなにも語らなかつた。

⑨ ただ、孤立しがちだった雅之君にとって、周囲のこの変化はとても大きな意味を持ち始めた。日々の色合いが絵の具を並べたように鮮やかになっていった。生涯をこの道にかけてもいいと雅之君は初めて思った。

顧問の先生は雅之君の作品を何枚か選び、コンクールに送った。雅之君の胸のなかには、いつの間にか、夜明けの金星みたいな輝きが宿るようになった。もうこうなったら、親がなにを言おうとバンさんにまた絵を見せに行こうと思った。

そこに突然の濁流をぶつけてきたのが今回の台風だった。十年に一度の大型台風だとテレビは報じていた。多摩川の土手沿いには消防車が並び、警戒水位を越えた場合は強制避難もあり得ると繰り返しアナウンス

していた。

そして、警告された通りの大型台風がやってきた。激しい雨が半日も降り続き、家が揺れるほどの風が吹き荒れた。まさか逃げ遅れていることはないと思ったが、雅之君はバンさんたちの安否を気づかった。暴れ狂う風の音を聞きながら、雅之君は「まんじりともできない夜を過ごした。」

台風が去り、天高い青空が現れても、<sup>⑩</sup>雅之君の胸のなかにはまだ強い風が吹いていた。橋の下がどうなっているのかとても心配だった。あの場所だけでも見に行こうと雅之君は思った。親の顔がちらついたが、とにかくそれは自分で決めたことだった。

そんななか、ちようど給食の時間にそれは起きた。

美術部の顧問の先生が「金賞！ 金賞！」と叫びながら教室に駆けこんできた。なにごとかと担任の教師は立ち上がった。教室もざわめいた。すると顧問は、雅之君の絵がコンクールで一位を取ったこと、副賞としてバりに短期留学できる資格を得たことなどを興奮冷めやらぬ口調で語った。教室のすべての生徒が立ち上がり、一人離れてすわっていた雅之君に拍手を送った。

橋はすぐ目の前にあつた。バンさんと顔を合わせたら、どんな言葉をかければいいのか。そればかりを考えていた雅之君は、風景がすっかり変わってしまった橋の前で立ち尽くしていた。

橋の下には流木が積み重なっていた。凄まじい量だった。そこにあらゆるゴミや灌木、自転車などが引っかけたり、無惨なオブジェとなつて空

(注2) オブジェ：石や木片、金属などのさまざまな物でつくりあげた芸術作品。

れ、<sup>Ⅲ</sup>ちぎれて引っかかっていた。そしてその下には、透明なポウルが挟まっていた。

雅之君は腰をかがめ、ポウルを引きずり出した。そのあたりにはまだ泥水が溜まっていて、小魚たちが背を出して<sup>Ⅳ</sup>もがいていた。雅之君は何匹かをすくい取ってポウルに入ると、ゴミだらけの斜面を下りて流れまで運んでいった。

母親の声が頭によみがえった。偽善、という言葉だった。

そうなのかもしれない。いや、きっとそうなんだと、雅之君は自分のことを思った。

浅瀬の水にポウルごと浸すと、魚たちは泥を吐くように舞い、四方に散っていった。雅之君はしばらくポウルをそのままにしておき、水を張るようにして持ち上げた。濁り水がポウルで揺れている。<sup>⑪</sup>自分の顔もゆらゆらと、そこであいまいに揺れている。

ふいに、込み上げてくるものがあった。

ひどいのは父親でも母親でもない。橋の下で暮らす人たちの気持ちを考えない世間でもない。一番汚いのは、他人の知恵を黙って使い、短期留学までしようとしている自分だ。

「盗んだのは……僕だ」

それだけをつぶやくと、<sup>⑫</sup>雅之君は息を殺して泣き始めた。

ポウルのなかの自分の顔に、涙が落ちていく。

—— ドリアン助川『多摩川物語』

間の半分をふさいでいた。人影はどこにもなかった。風が吹く度に、その巨大な残存物はビューッと奇妙な音を立てた。生まれなくなつた怪物が、自身の姿を知って泣いているかのように。

苦しい命を宿したかのようなその音のなかで、雅之君は一人のホームレスがバンさんについて語っていたことをふいに思い出した。

「生きてりや、あんたと同じぐらいになる息子さんがいたんだってよ」

そう聞かされた時、雅之君はバンさんの息子さんの名前を知っていると聞いた。だからもう、バンさんは他人ではないのだ。それなのに、自分はずっとここに来なかった。

怪物の泣き声に引つ張られるかのように、ゴミ溜まりと化した橋の下に雅之君は入っていった。陽光がさえぎられる。そのとたん、<sup>⑬</sup>冷たく暗い、濡れた空気の塊が雅之君を呑みこんだ。

雅之君の足がまた止まった。

ここで暮らさなければいけない人たちの気持ちを、だれか本気で考えたことがあるのだろうか。雅之君はそう思った。制度だとか、福祉だとか、そんなことじゃなくて、ここで暮らさなければならぬ人たちの気持ち。

父親が放った、「盗み」という言葉。なぜかそれも思い出される。雅之君はこめかみのあたりに<sup>Ⅱ</sup>した震えを感じた。

盗み……。

ひよつとしたら、バンさんはなにひとつ盗めない性格だったからこそ、空き缶をつぶす人になってしまったのではないか。

雅之君は残存物の横をゆっくりと歩いた。すると、ぶつかり合った流木の下に、ブルーシートの切れ端があった。流木と鉄のフェンスに挟ま

問一——線部①「世界にも、自分にも、大きな穴があいたみたいだと雅之君は思った」とありますが、この時の雅之君の気持ちを説明したものとして、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ひごろ見なれていた景色をすっかり変えてしまった自然の力に、おそろしさを感じている。
- イ 台風によって、以前目にした美しい景色が永遠に失われてしまい、むなしさを感じている。
- ウ 自分の思い出やバンさんの住む場所をうばっていった台風に對して、いかりを感じている。
- エ まるで人間の作ったものすべてをこわすかのような自然の行いに、おどろきを感じている。

問二——線部②「雅之君はその言葉の意味を具体的に感じ取った」について、

- (1) 「その言葉」とは何を指しますか。文中からぬき出して答えなさい。
- (2) 「雅之君はく感じ取った」とはどういうことですか。「く」ということ」につながるように、これより後の部分より三十五字以内でぬき出し、はじめと終わりの五字で答えなさい。

問三——文中の「I」～「IV」にあてはめるのにふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。なお、記号は一度しか使えません。

- ア ずたずたに                   イ ひたひたと                   ウ そろそろ
- エ びりびりと                   オ ぴちゃぴちゃと                   カ どんどん

問七——線部⑥「他のホームレスの人たちは『またそれか』と笑っていた」とありますが、ホームレスの人たちはバンさんのことをどのように思っているのですか。それを説明したものととして、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 同じことをくり返して行うバンさんからかう気持ちはありつつも、バンさんの大事にしていることに共感し、また、そんなバンさんのことも受け入れている。
- イ バンさんが好んで行うことを、面白いことではあるが、意味のないことだとも思っているので、そんなことをくり返すバンさんを秘かにあわれんでいる。
- ウ バンさんが何度かためて見せてくれるものすばらしさに感動し、それをふたたび見ることができるとをうれしく思い、バンさんに感謝している。
- エ 自分たちには重要さを感じられないことをすごいことだと主張するバンさんの思いこみの強さにあきれ、正しいことがわからないバンさんを見下している。

問八——線部A「目の色を変える」・B「ささくれ立っている」・C「まんじりともできない」のここでの意味を説明したものとして、もつともふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A ア 一心に集中する様子
- イ つかれて顔色が悪い様子
- ウ 心をいれかえて努力する様子
- エ まわりへの気づかいができない様子

問四——線部③「迷いがなかったと言えようそになる」とありますが、雅之君は何を迷っていたのですか。それを説明したものととして、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 雨が降ってきたので、絵を描くのを途中でやめること。
- イ バンさんに自分の絵を見せ、評価をもらうこと。
- ウ バンさんやその仲間たちと親しくなろうとすること。
- エ 雨やどりのため、バンさんに会いに橋まで行くこと。

問五——線部④「歯を見せて笑った」とありますが、このときのバンさんの気持ちを説明したものとして、ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 思いもよらず、自分を訪ねてきた雅之君を歓迎する気持ち。
- イ 顔見知りの関係になった雅之君に對し親しみを表す気持ち。
- ウ 自分には友人がいると仲間に対していばりちらす気持ち。
- エ 自分の大事にしているものを見せられることを喜ぶ気持ち。

問六——線部⑤「今日は面白いものがあるぞ」とありますが、「面白いもの」とは雅之君にとつて、具体的には、魚のどのような姿でしたか。十字以内でまとめて答えなさい。

- B ア 先行きのことを不安に思う
- イ 感情がずさんでとげとげしくなる
- ウ するべきことをすることができない
- エ たったひとりだけで行動する
- C ア 不安をおさえられない
- イ 落ち着いていられない
- ウ 何もやる気にならない
- エ ねむることができない

問九——線部⑦「熱を帯びた口調」とありますが、どのような気持ちからこのような「口調」になるのですか。その説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、その記号で答えなさい。

- ア 雅之君の絵が優れたものになり、多くの学生が感心することをねたむ気持ち。
- イ 自分が教えていないのに、雅之君の絵がすばらしいことを不満に思う気持ち。
- ウ 雅之君の描いている絵がとても優れていることにおどろき、興奮する気持ち。
- エ 雅之君の絵の描き方がなぜ変わったのかを探り当てたいと強く思う気持ち。

問十 — 線部⑧「この変化し鮮やかになっていった」とありますが、これはどのようなことを表していますか。それを説明したものと、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学校で一人でいた雅之君が評価され、周囲に生徒たちが集まり、雅之君が生き生きとした日常が送れるようになったこと。
- イ 新たな見方を得たことで、雅之君が何気なく見ていたものが豊かな色彩にあふれたのだとわかったこと。
- ウ 色彩の鮮やかな絵を周囲の人たちにほめられて、雅之君が積極的に絵を人に見せるようになったこと。
- エ 雅之君が絵の才能に確信が持ったことで、周囲の生徒たちをゆるせる気持ちになったこと。

問十一 — 線部⑨「夜明けの金星みたいな輝きが宿るようになった」とありますが、この「輝き」は何をたとえたものだと考えられますか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の未来への希望
- イ 好きなものに取り組む喜び
- ウ 絵を描くことに対する自信
- エ 他の生徒に対する優越感

問十四 — 線部⑫「自分の顔もゆらゆらと、そこであいまいに揺れている」とありますが、これは雅之君のどのような様子を表していますか。それを説明したものと、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 以前バンさんと見たポウルをきっかけに、そのときのことを思い出そうとするが、できない様子。
- イ バンさんに生きていてほしいと思いつつも、命を落としたのではないかと不安な様子。
- ウ バンさんに会うことは、よい人のふりをしたいからではないかと自分自身を信じられない様子。
- エ バンさんがいなくなり、教わった絵の描き方の大切さを忘れ始め、どうしたらよいかわからない様子。

問十二 — 線部⑩「雅之君の胸のなかにはまだ強い風が吹いていた」とありますが、これはどういう意味ですか。それを説明したものと、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 台風におそわれたバンさんたちが無事なのかどうか心配なこと。
- イ 勢力の強い台風をおそろしく思う気持ちがまだ残っていること。
- ウ バンさんに会いに行くことと親にしかられるのではないかと、迷っていること。
- エ 台風の危険をバンさんに教えなかったことを後悔していること。

問十三 — 線部⑪「冷たく暗い、濡れた空気の塊が雅之君を呑みこんだ」とありますが、これはどういう意味ですか。それを説明したものと、もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア バンさんの住んでいたところが台風によって被害を受けてしまったことで自然のおそろしさを実感したこと。
- イ 実際にバンさんが暮らしていた場所に入ることによって、バンさんがかかえていた苦しみやつらさを身体で感じたこと。
- ウ 住む場所をうばわれてしまったバンさんのこれからの生活の展望が見えず、バンさんの将来の暗さを想像したこと。
- エ 会わなくても、その存在をいつも意識していたバンさんが、現実になくなってしまったさびしさにうたれたこと。

問十五 — 線部⑬「雅之君は息を殺して泣き始めた」とありますが、なぜ雅之君は泣いたのですか。その説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア バンさんから学んだものの価値をわかりながら、両親に言われたことに従い、バンさんに会いに行かなかった自分のみにくさに思いいたったため。
- イ 今回の台風に住まいをこわされたバンさんたちは、おそろしさからもうここには戻ってこないと考え、二度とバンさんに会えなくなることを恐れたため。
- ウ いつもバンさんが笑顔を見せていたために、バンさんが内心では、厳しい生活をおくりながら苦しんでいたことに気づかなかった自分を責めたため。
- エ バンさんの内面のすばらしさを理解していたにもかかわらず、父の発言でバンさんをも「盗む」みにくい人と誤解していたことに気づいたため。

## 問題六

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(問題の都合で本文の一部を変えています。)

① 体が十分大きくなっていない子どもたちは、その大きな脳で何をしますのでしょうか。基本は、「役に立たないこと」に没頭することができます。つまり、遊びです。子ども期とは、成長したその脳を大いに使って遊んでいることができる期間なのです。

「子どもは遊ぶ存在だ」と言うとき、みなさんの中には、Aと感ずる人がいるかもしれません。学校でも、家でも、おとなから「遊んでばかりいてはいけない、勉強しなさい」と言われることが多いでしょう。しかし、このように勉強勉強と言われるようになったのは、人間の歴史の中ではごく最近のことです。

— 中略 —

みなさんは、勉強も宿題もない世界の方がよかったと思うでしょうか。I、科学技術と貨幣経済によって支えられた社会に暮らす以上、勉強することは必要だと考えるでしょうか。よいか悪いかはひと言では言えませんが、私たちはすでに、学校がなければ支えきれないほどの複雑な社会をもっています。

ここで覚えておきたいのは、子どもたちは、もともと、いつもおとなに言われるままになる存在ではなく、自ら遊び、学ぶ人たちであったということです。おとなと同等の脳をもち、ただし体力がおとなほどそなわっていないために、おとなとは別の活動領域をもって生きている人たちです。おとなと子どもを対等に受け止めることは、重要です。

② II、ここからは、子どもたちが実は少しずつ異なっているということ(多様性)について考えます。まず、体が異なるということに注目します。

脳が育ち、次に体が育つという流れは、だいたい多くの子どもたちに共通しています。III、よく見れば、人によって少しずつその時期がずれたりすることがあります。みなさんの周りでも、背が真っ先に伸びる人もいるし、後からゆっくり伸びていく人もいるし、顔つきや運動能力、得意な勉強なども少しずつ違っているでしょう。それぞれ生まれつきの特徴があり、IV、違う家庭や環境で育つのですから、違っていて当たり前なのです。逆に、全員が、同じ日にまったく同じだけ身長を伸ばさなければならぬなどと考える方が不自然です。

そのような個人差の中で、脳や体が大きくなるのがかなり遅かったり、体の一部の働きがそなわらなかつたり、弱かつたりする人もいます。それも、体の個人差のうちのひとつです。それを「障害」「病気」などと呼ぶこともあります。ここでは、「体の違い」と呼ぶことにしておきます。もちろん、このような違いは、本人のせいではありません。

このように、③ 育ちの姿や時間の長さが違う子どもたちがいた場合は、どうしたらいいでしょうか。みんなを支える時間を少し延ばしたり、支え方を工夫したりすればよいことでしょうか。そもそも、だれもが未熟であった時期をもっていて、だれかの手によって支えられながら私たちは生きてきたのです。

V、病弱で生まれて、長い年月を病室で過ごすことになる子どもたちがいます。そういう子どもたちは、生まれながらに不幸なのでしょうか。体が少し違った育ち方をして、周りが支える時間と方法に工夫をしているだけで、みなに支えられて育ってきた多くの子どもたちと基本

的に同じことです。

④ わたしも、小学生のときに長い入院生活をしたことがありました。同室の子どもたちとゲームを貸し借りして遊び方を教わったり、アクセサリーを作って包帯に付けてみたり、当時はやっていたルービック・キューブというパズルの解き方をめぐって病院のお医者さんと競争したり、ある意味では楽しい日々を送っていました。時にはちょっと病院を抜け出して近所の公園に外の空気を吸いに行き、また、病院の廊下で車いす競争をしたこともあります(これは看護師さんにしかられましたが)。もちろん、治療の時に痛い思いをしたり、中には亡くなってしまふ友だちもいたりして、楽しいことばかりではありませんでしたが、そのような経験も含めて、病弱な子どもなりに、その体がつむぐことができる暮らしを毎日送っていたなあと思ひ出します。

病室で長年過ごす子どもたち。車いすを使う子どもたち。生まれながらの病気をもつ子どもたち。中には、生きられるのがあと何年とほぼ定まっている重い病の子どももいます。しかし、どの子どもも、もちあわせた大きな脳と小さな体を使いこなし、苦しいこともあれば、また楽しく遊ぶこともある。それぞれの暮らしの達人です。さまざまな体を持つ子どもたちと、ひとりひとり出会っていききたいと思ひます。

③ 次に、大きく育った脳をどのように使うかについて考えます。脳が大きくなると、知的な活動が活発になります。ことばや物事をいち早く覚え、論理的に考え、さまざまなことを予測したり思い付いたりするなど、子どもたちはおとなも顔負けの優れた力を示すことがあります。

④ しかし、時どきおとなの関わりによって、脳の力を活かさない残念なできごとが起こることがあります。「ことばを身に付けることを奪わ

れる子どもたち。」みなさんはこのような状況を想像できるでしょうか。

X

ところが、一時期、おとなたちが聞こえない子どもたちに手話をなるべく教えないという教育を考え出し、学校で手話を使うことを許さない時代がありました。「耳が聞こえない子どもたちも、なるべく音声のことばを覚えた方が、周囲の聞こえる人たちとコミュニケーションができてよいだろう」という考え方に基づくものでしたが、その考えが行き過ぎて、手話というろう者たちが自然に生み出したことばを否定する風潮さえ生んでしまったのです。

子どもの時代は、ちょうどことばを覚えるのに適した時期です。その大事な時期に、自分が最も覚えやすく理解しやすい手話を奪われた聞こえない子どもたちは、困惑しますし、腹も立っています。⑤ それに反発する子どもたちもいました。しかし、耳が聞こえるおとなたちの意見の方が強く、学校で手話を使えない時代は何十年も続きました。聞こえない子どもたちが、自分の脳の力を大いに活かしてことばの世界を自由につむぎ出す機会を、耳の聞こえるおとなたちが奪ってしまった残念なできごとでした。

⑥ 最近では、世界でも日本でも、手話を言語のひとつとして受け止める風潮が強まってきました。手話は言語であるとはつきり位置づけた国連の障害者権利条約を日本も正式に受け入れ、政府もようやく手話を言語であると認めるようになりました。聞こえない子どもたちが身に付けがたい音声言語の訓練ばかりするのではなく、手話を学び、いきいきと議論し、自分の意見を手話で堂々と述べる光景も、学校に戻って来つつあります。

子どもが自分の脳の力を活かして、周囲の人びとのさまざまなことを吸収し、自分のものにする。これを「文化の習得」と呼ぶことができますが、これは社会の一員となる上で重要で、大切な権利でもあります。忘れてはならないのは、この聞こえない子どもたちのように、「体の違いによって、なじむ文化やことばが違うことがある」ことです。

— 中略 —

4 体の違いと、それをとりまく文化の違いについて考えてきました。文化人類学という分野では、このような<sup>⑦</sup>さまざまな違いに「序列を付けない」ということを何よりも重視します。「こんな体でかわいそうだ」「私のことばが当たり前で、他のことばは変だ」などと決めつけないということです。どの子どもも、それぞれの体に合った文化を身に付けながら、社会の一員となっていくのです。そのことに、よいも悪いもありません。子どもとは、「何かの役に立つこと」から解放されている時期です。大きな頭と小さな体の使い方を、自分で決めてよい自由な時間があります。ひとりひとりが少しずつ違いながら、自分の背丈に合った暮らしをつむいでいく、それぞれがみな暮らしの達人たちです。体と文化の違いをもった子どもたちの姿にお互い<sup>⑧</sup>出会い会うことで、人間の可能性の幅広さについて学んでいきませんか。これが、世界のさまざまな障害をもった子どもたちから多くのことを教わってきた文化人類学者である 私からみなさんへのメッセージです。

— 亀井信孝「さまざまな体、さまざまな文化」

(「いのちはどう生まれ、育つのか」道信良子編・所収)

問一 — 線部①「役に立たないこと」～遊びです」とありますが、

「役に立たないこと」と、なぜわざわざ「」をつけて書くのですか。それを説明したものとして、もつともふさわしいと考えられるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 遊びは何も生み出さず、社会の「役に立たない」のは明白なので、「役に立たない」ことを強調したいから。

イ 遊びがすべて「役に立たない」のではなく、遊びの中には人の役に立つものがあるので、その注意をしたいから。

ウ ふつうは遊びは「役に立たない」と思われているが、筆者は遊びを「役に立たない」とは思っていないから。

エ 遊びが「役に立たない」とこととされていたのは、人間の歴史ではごく最近のことであることを伝えたいから。

問二 文中の[A]にあてはめるのにもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あれ、おかしい。 イ ああ、うれしい。

ウ そう、その通りだ。 エ おや、おとなのようだ。

問三 文中の[I]～[V]にあてはめるのにふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。なお、記号は一度しか使えません。

ア さて イ たとえば ウ また

エ それとも オ しかし

問四 — 線部②「育ちの姿やどうしたらいいでしょうか」とありますが、筆者の示している答えを、「～する」に続く形で、本文より三十字以内でぬき出し、はじめと終わりの五字で答えなさい。

問五 — 線部③「わたしも、小学生のときに長い入院生活をしたことがあります」とありますが、筆者が自分の入院生活を書いているのはどのようなねらいからですか。それを説明した次の文の(1) (2)に入れるのにふさわしい言葉をそれぞれ指定された字数で本文中よりぬき出して答えなさい。

・すべての子どもたちが(1)九字を十分にはたらかせて暮らしていきける(2)六字であることを伝えるため。

問六 — 線部④「時どきおとなの関わり～起こることがあります」とありますが、これは「おとな」がどのようなことに気づかなかつたからですか。そのことを説明した部分を本文中より三十字以内でぬき出し、はじめと終わりの五字で答えなさい。

問七

文中の X で囲まれた部分には次の四つの文が入ります。これらを正しい順番に並べかえたものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 耳が聞こえない人たちは、「手話」という目で見る言語をもっています。
- (2) 手話を話して暮らしている耳の聞こえない人たち（ろう者）は、日本だけでも何万人といるのです。
- (3) 聞こえない子どもたちは、耳で聞き取れない音声の言語よりも、目で見えてよく分かる手話の方が覚えやすいし、体にも合っていることが多いです。
- (4) 私たちの社会には、耳が聞こえない子どもたちがいます。

- ア (1) ↓ (3) ↓ (2) ↓ (4)      イ (1) ↓ (4) ↓ (2) ↓ (3)
- ウ (4) ↓ (3) ↓ (2) ↓ (1)      エ (4) ↓ (1) ↓ (3) ↓ (2)

問八

線部⑤「それ」とありますが、その指し示している内容を本文中より「〜こと」につなげる形でぬき出し、十字以内で答えなさい。

問九

線部⑥「手話を言語のひとつとして受け止める風潮が強まってきました」とありますが、このようになったのはどのようなことが理由と考えられますか。それを説明したものととして、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おとなたちが、手話は耳の不自由な人の体に合っていると理解したから。
- イ おとなたちが、手話でもコミュニケーションができると実感したから。
- ウ おとなたちが、手話を自由に使えず悲しむ子どもたちに同情したから。
- エ おとなたちが、手話がしくみの単純な覚えやすいものだと納得したから。

問十

線部⑦「さまざまなく重視します」とありますが、おとなと子どもに「序列を付けない」考え方から本文では、「子ども」をどのように説明していますか。それを説明した部分を [1] より二十五字以内でぬき出して答えなさい。

問十一

線部⑧「私からみなさんへのメッセージ」とありますが、そのメッセージの内容はどのようなものですか。それを説明したものとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 何かの役に立つことではなく、自分の成長のために時間を使っているときが子どもたちにはあると認めることの大切さ。
- イ 私たちみんなが自分の暮らしを確立していくために、世界のさまざまな人たちの文化を広く知っていくことの大切さ。
- ウ 子どもたちのもっているそれぞれの違いを受け入れて、さまざまな可能性を人間が持っていることを知るものの大切さ。
- エ 子どもたちが自分の力を活かして、自分の周りのことを吸収し自分のものにする手助けをおこなうことの大切さ。

問十二

次の各文について、この本文の内容を説明したものととして、正しいものには○を、まちがっているものには×を書きなさい。ただし、すべて○で、または×で答えてはいけません。

- ア 子どもは、おとなに言われるとおりに勉強をすることによって成長していく。
- イ 学校は、科学技術の発達などで複雑になった社会を学ぶために存在している。
- ウ 耳の聞こえない人は手話がわかればよく、音声による言語を覚える必要はない。
- エ 人間はいろいろな違いがあっても、時間をかけて同じことができる。
- オ 子どもたちにはひとりひとり違いがあるが、そのひとりひとりに良いも悪いもない。

